

## 期末テストについて

シラバスのとおり、テストは40点満点。毎回のコメントの評価が60点満点。その合計で成績評価する。

記述式問題が5問。そのうち、すでに公開している問題は4問。○×（マルバツ）の正誤問題が3問。未公開の問題は、ユニパで課題名「期末テスト」で公開する。事前公開問題については各自で配布資料をチェックすること。

## オリンピックと言語

本来であれば、2020年は東京オリンピックが開催される予定であった。これまで、各方面で準備がすすめられてきており、言語という面でも対応が協議され、整備されてきた。

たとえば、東京都オリンピック・パラリンピック準備局が「2020年オリンピック・パラリンピック大会に向けた多言語対応協議会ポータルサイト」を運営している（<https://www.2020games.metro.tokyo.lg.jp/multilingual/>）。このサイトを見ると、最近も「新型コロナウイルス感染症対策に係る多言語対応・ピクトグラムでの取組」という情報を公開している（<https://www.2020games.metro.tokyo.lg.jp/multilingual/references/torikumi.html>）。

社会言語学の専門誌である『ことばと社会』は2019年刊行の21号で「オリンピックと言語」を特集した。

日本語教育学会の『日本語教育』も2016年刊行の165号で「2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催と日本語教育」を特集した（全文がPDFで公開されている [https://www.jstage.jst.go.jp/browse/nihongokyoiku/165/0/\\_contents/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/browse/nihongokyoiku/165/0/_contents/-char/ja)）。

新型コロナウイルスの世界的な感染状況を見れば、2021年にオリンピックを開催することは困難であるように予想される。中止となったとしても、どのようなことが議論され、整備されてきたのかを確認し、再検証する必要があるだろう。

公共図書館でも、オリンピックに関する書籍をあつめたコーナーを設置している場合がある。それを見ると、かなり多種多様な本が紹介されている。たとえば、奈良県立図書館が2016年に企画した「ブラジルの素顔に迫る 歴史と文化・風土、そしてリオから東京オリンピック・パラリンピックを読む」の展示資料リストは、ブラジルへの移民の歴史なども展示しており、2016年リオデジャネイロオリンピックと東京オリンピック、そしてスポーツという文化について多角的にとりあげている（[https://www.library.pref.nara.jp/event/booklist/brazil\\_20160701.html](https://www.library.pref.nara.jp/event/booklist/brazil_20160701.html)）。

## 災害の激化と避難所の課題

気候変動により、豪雨災害や台風、突発的な竜巻など、これまで経験してこなかったような災害が多発するようになってきている。夏には40度前後の猛暑にさらされている。「気候正義」というキーワードで議論されているように、地球温暖化をくいとめるためには国際的な協力が不可欠であるといえる。

日本では災害が発生したときには主に学校の体育館が避難所になる。しきりも満足にないような状況で、雑魚寝（ざこね）のような状態で避難生活をおくることになる。今回、新型コロナウイルスの感染流行により、避難所のありかたが、あらためて議論されている。

避難所がどのようにあるべきかについては、国際的な基準として「スフィア基準」というものがある。『スフィアハンドブック』が参考になる（[https://jqan.info/wpJQ/wp-content/uploads/2019/10/spherehandbook2018\\_jpn\\_web.pdf](https://jqan.info/wpJQ/wp-content/uploads/2019/10/spherehandbook2018_jpn_web.pdf)）。

避難所という空間にも、多文化の面で注意する必要がある問題がある。避難所のトイレの問題も重要である。

また近年、夏には40度前後の気温におそわれることが一般化している。熱中症を予防するためにも、街中に日陰（ひかげ）で休めるところがどれだけあるかということも重要になってくる。緑がどれだけあるかということでもあるし、日光や雨にさらされることなく、すわって休める場所がどれだけあるかということでもある。

## 正解のないなかで

新型コロナウイルスへの対応を見ても、各国で、あるいは各自治体でその対応はことなっている。個人情報保護をそれほど重視しないような対応もあれば、日本のように「お願いベース」で対応している場合もある。感染防止の方針にしたがわない市民を罰するようなアプローチをとっている国もある。たとえ感染が拡大することになっても集団免疫の形成を目指す国もある。ある程度の時間がたってみないと、それぞれの対策の是非を評価することは困難である。死者数や重傷者数の大小を比較することはできるかもしれないが、そもそも統計上の数字を国際的に比較することができる状況ではない。新型コロナウイルスの検査は、国によって実施数に差がある。積極的に検査を実施している場合もあれば、検査を抑制している場合もある。表面的な数字を見て判断するのではなく、それぞれの数字をよみとく必要がある。数字の背後にある個々の社会状況を把握する必要があるのだ。

## デマの横行

正解がないとはいっても、あきらかな事実誤認というものはある。「マスクは無意味だ」「コロナはフェイクだ」などというのは妄想でしかない。信じたいものだけを信じるという態度が、たくさんのデマをうみだしている。そして、ほかにも信じている人がいることを根拠に安心してそのデマを信じてしまう人がいる。ワクチンの全否定、温室効果による地球温暖化の否定、新型コロナウイルスに関するデマなど、悪質なデマが横行している。

ご都合主義的に情報を取捨選択し、信じたい情報だけを信じるという態度にたつのではなく、根拠にもとづいて論理的に考えるという態度が必要である。しかしそれは、なかなか難問であるようだ。

## 全体主義の問題

もうひとつの論点は、全体主義の問題である。たとえば「外出自粛」といっても、むずかしい場合もある。近所を散歩することさえ非難するようなまなざしは、あきらかに過剰反応であったといえる。マスクについても、すべての人が着用できるわけではない。幼児や知的障害者、自閉症の人など、マスクをつけるのが困難な場合もある。「ほとんどの人がマスクをしている状態」を維持していれば十分であり、「すべての人が」マスクをする状態を目指すのは過剰な全体主義である。とはいえ、海外で見られるようにマスクをつけること自体を嫌悪しマスクの着用を拒否している場合をどう考えるかという問題もある。

緊急事態宣言の時期には「ステイホーム」などという呼びかけが連呼されていたが、家庭で過ごすことがしんどい人もいる。家庭のなかで家事の負担が過重になった人もいる。家族関係で苦労している人もいる。家族と過ごす時間が増加することで、家庭内暴力が増加してしまったということもある。しかし、そういった事態におかれている人の境遇をまったく知らない人もいる。だからこそ、「ステイホーム」を連呼できてしまうのだろう。家庭以外に居場所があったほうが安全である。しかし、緊急事態宣言の状況では多くの公共施設が閉鎖されていた。

遠隔授業への対応でも、家庭の事情で特にライブ型に苦労していた学生もいるだろう。

## 事態の長期化と油断

一方で、新型コロナウイルスの感染拡大がとまらない状況にあっても、緊急事態宣言の時期のような慎重さが見られなくなっている様子も確認できる。これまで大丈夫だったからというような、あまり根拠のない安心感があるのかもしれない。いつまでも行動自粛をつづけられないという気持ちもあるだろう。飲食店で大声で話をしながら会食している様子も見られる。感染防止のために注意するにしても、程よい加減にしておかなければ、緊張がほどけたときに油断してしまう。

## まとめ

今回、新型コロナウイルスの感染拡大により、あちこちで面会制限が実施されている。面会は「家族のみ」であると家族でも面会できないという場合もある。ここで、「家族」とはなにかという問いがでてくる。また、面会したいという要望をどのように実現するのかという問いもある。非常時には、それまで意識しなかったような問題が浮上し、とまどうこともある。しかし、非常時に直面する問題の多くは、これまでの日常にひそんでいた問題でもある。多くの人が問題なく生活していたこれまでの「日常」において、困難をかかえていた人もいたわけである。非常時に発覚した問題を議論することは、これまでの日常を問いなおし、これからの日常をつくりなおしていくためにも必要なことである。

### 遠隔授業について一あべの感想

今回、対面授業を実施することなく最終回をむかえました。例年の倍近い数の受講登録をうけ入れたときから、予想されていたことでした。わたしの対面授業のスタイルは、配布資料（A4で8ページほど）の配布と解説、関連情報の提示、学生への問いかけというものです。人がそこに集まれば、いろいろな力学が作用します。笑い、うなづき、ポカんとした顔。そのようなフィードバックもあれば、居眠り、私語、そもそも来ないというフィードバックもあります。状況が次第に変化し、楽な方へと向かう学生と、ながされずに自分のペースで参加する学生にわかれていきます。

今回の遠隔授業では、授業の内容をふまえたうえで自分なりの興味関心をもとに、毎回の話題をほりさげていこうとするコメントが多数確認できました。自分で見つけてきたいろんな論文や動画を紹介するコメントがあり、「すばらしい」と感じながらも紹介しなかった場合も多々ありました。例年と比較すれば、今回はコメントを書く時間がたっぷりありました。その結果、意欲的で良質なコメントがたくさん集まりました。例年であれば、手書きで提出された文章をわたしが入力して紹介するという方法でした（希望者はメールで提出）。今回は、すべてのコメントが電子テキストで提出されたため、いいコメントをえらんでコピー・ペーストするだけの作業となりました。レベルの高いコメントがたくさん提出され、作業もしやすかったので、結果的に毎回の配布資料の文字数が相当な量になってしまったことは、少なくとも学生の負担になったかもしれません。ただ、大学にあつまれない状況としては、ほかの学生の意見はとても意味のある情報だったのではないのでしょうか。

なれないパソコンで遠隔授業に対応することになった学生もたくさんいたと思います。しかし、いまの時代、パソコンになれておいて損をすることはありません。スマホ世代こそ、キーボードでの入力に適應してほしいと思います。フリック入力が早いなどというのは幻想です。

今回の遠隔授業では、どうでもいいような雑談をしませんでした。その点が例年の対面授業との決定的なちがいであったのかもしれない。

大学教員は、文章を書くプロです。論文や本を書くのが専門です。動画は専門外です。遠隔授業の対応で文章を書く課題が大量にでたかもしれません。しかし本来、大学で学ぶこと、教員から学べることの本筋は、文章を書くことです。ただの文章ではなく、根拠のある、論理的な文章です。文献をふまえながら、自分がつくりだす、自分だけの文章を書くことが大学で学ぶことの本道なのです。その練習ができたのであれば、遠隔授業は成功しているのです。学生同士の交流や教員との対面・交流ができていないことは、もちろん過小評価していいことではないでしょう。しかし、人との一定の距離がもとめられる現在の状況では、しかたのないことです。

わたしは自分のウェブサイトには配布資料を公開しているので、よほどのことがないかぎり、配布資料はずっと公開してあります。ユーチューブの動画資料も、そのままにしておきます。将来、ふと思い出したときにアクセスして見てください。なにか発見があるでしょう。

## コメントの紹介

「漢字テストのふしぎ」を見て衝撃を受けたのは、「漢字テストでは、文字としてではなく図形として漢字を見ているかもしれない」という教員の言葉である。こんなことでは「漢字の学習」にはなっていないので、漢字テストは無くしてしまっても良いのではないかと思った。しかし、関連動画で出てきた「漢字指導の3 採点の仕方について 許容範囲について理解してください。」(URL: [https://www.youtube.com/watch?v=Bmtsk4J9M\\_I](https://www.youtube.com/watch?v=Bmtsk4J9M_I))を見て少し考えが変わった。その動画の冒頭では、平成28年に発表された文化庁の新たな基準について触れられていた。気になったので実際に調べてみた。文化庁のサイト(URL: [https://www.bunka.go.jp/koho\\_hodo\\_oshirase/hodohappyo/pdf/2016022902.pdf](https://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/pdf/2016022902.pdf))によると、新たな基準として「稚拙に書かれている場合にもその文字が備えておくべき骨組みを過不足なく持っている」と読み取れるように書かれていれば、それを誤った文字であると判断することはできない。」と断言されていたのだ。関連で出てきた動画に話を戻すと、その動画で投稿者の方が「書字障害の子は、字の形を正しく認識するのに時間がかかる。正しく書けるようになるまで、その子の字にペケをつけ続けますか?」と言っていて、なるほどと思った。識字障害については授業資料に登場していたが、字を書くことが困難である書字障害については初めて知ったし、考えも及んでいなかった。「漢字テストのふしぎ」の中で多数の教員方が行っていたような、字の多様性を認めない従来の採点方法では、確かに書字障害のこの書く漢字はバツにされる可能性が極めて高いだろう。もしかしたら、バツをつけられた子は「漢字」が嫌いになり、勉強することを放棄してしまうかもしれない。これでは、授業資料にあった「均質化された空間になじめない学習者に対する他者化」や障害者の排除につながりかねない。「漢字テストのふしぎ」制作時には曖昧であった採点基準は、平成28年の文化庁の発表によりある程度の具体性を持ったと私は考えている。しかし、SNSで度々取り上げられる漢字テストの細かすぎる採点を見る限り、文化庁の「新たな基準」は現場では未徹底であるように感じる。「漢字の採点基準」の懐を深くすることは、全ての人が当たり前、自由に学べるようにする足がかりになると考える。だから、一刻も早くこの新たな基準を現場に浸透させる必要があるだろう。

-----

授業の中で取り上げられた「漢字テストのふしぎ」を視聴しました。採点基準が先生によって異なり、点数も大幅に違っていました。述べられている反論も、自分にはその場しのぎのように思えてなりません。日々無数のテスト採点をしなければならない先生が、毎度漢字の形を辞書で調べていては身が持たないと思います。しかし、生徒である自分からしてみれば、これで自分の成績を決められたらたまったものではないとも思ってしまいます。難しい問題だと思いました。

「漢字のとめはねの丁寧さはテストにおいてどのように評価されるのか」([https://www.jstage.jst.go.jp/article/taikaip/77/0/77\\_99/\\_pdf/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/taikaip/77/0/77_99/_pdf/-char/ja))という論文には、「国語の漢字の書き取り問題においては、高校教員よりも小学校教員の方が字形は正しいが「とめ」「はね」ができていない解答を正答とは評価しないことが明らかとなった。その背景として、特に小学校では漢字を細部まで注意して丁寧に書かせる指導を重視して行い、「とめ」「はね」への気づきを促すために△や×をつける傾向があるのではないかと考えられる。」とありました。レジュメの最初に、「学校の教育は、システム化されており、その仕組みになじめる人と、なじめない人がいる。」とありましたが、そのとおり、小学校では「漢字を細部まで注意して丁寧に書かせる指導を重視して行」うシステムに、なじめているかどうかは基準になっているんですね。そして、中・高校では受け入れられるかもしれないのに、小学校でなじみずに学習意欲をそがれてしまったとしたら、本当にもったいないことだと思います。動画では先生ひとりひとりに意識調査をして、先生が頭を悩ませている姿が見えました。しかし、その「システム」のなかに組み込まれている以上は自分だけ変わるというのは難しいと思います。もっとこの問題がひろく知れ渡って、「システム」自体を変えられるような大きな議題になってほしいと思います。

-----

試験において必要な人には配慮がなされるが、事前の申請や医師の診断書が必要である。2019年、センター試験において定規を使用したことで不正行為となり、全科目が無効となったというニュースがあった([https://www.kyobun.co.jp/news/20190123\\_01/](https://www.kyobun.co.jp/news/20190123_01/)より)。ディスレクシアなどで文字を読むことを困難に感じている人が定規やリーディングトラッカーを使うことによって読むことが容易になるのであれば、使用を認めるべきだと思う。この件で、「注意事項に書いてあって、それを読まなかったのだから仕方ない」という意見があるかもしれない。しかし、その人は自分がディスレクシアだと本人も気づいておらず、普段から定規を用いた方が楽だからと定規を使用して読んでいるとする。そして試験当日、定規の使用がみとめられていないことを知った時、診断書の用意はできない。また、ディスレクシアという診断を受ける程度ではなくてもそういった器具を使いたいという人もいるだろう。さまざまな状況を考えて配慮がされるように願う。たとえば、入試センター側でリーディングトラッカーを準備するなどができないのではないか。

-----

テストに限らず、その物事の本質を守るためのはずの不正の防止が、公正な評価のための機会を妨げることになってしまっていることはよくあると思う。規制だけにいつの間にか執着してしまうと、かえってそのシステムに適応できる人物だけを評価する、正しいとは言えないシステムが出来上がってしまうと思う。もちろん不正への取り締まりを緩くしろと言っているのではない。不正ではないが障害があることでそもそも同じ土俵には立てない場合への配慮が、不当な優遇として誤解されている場合が問題なのだと思う。可能な限りのユニバーサルデザインを達成したテストが、それが可能な場合は本来の目的を見失うことのない程度の寛容さと秩序の両立が、多様な人々に対して能力を可能な限り発揮させることのできる機会を与えることにつながるのではないだろうか。

読み書きできない人＝「ともに学べなかった人」という考え方はとても大切なものだった。何かができないのは、必ずしもその人ができる人より劣っているということではない。それぞれできるできないには個人差があるんだからと考える人は多いだろうけど、そもそもそれを学ぶ機会がなかったからかもしれないと考えられる人はどのくらいいるのだろうか。前回のコミュニケーション能力についてもそうだったけど、その人自身に何か原因があるというよりも、その人が安心してコミュニケーションを取れる関係や、その人が持つ力を十分に発揮できるような場所、「やりたいことがあり、それをやるだけのゆとり」を持てるような環境を作れていないその周りの人々、もしかしたら自分に原因があるのではないかと。人それぞれ持っている文化は少しずつ違って、人と触れ合うことがすなわち多文化交流なのだと考えるようになった。異なる文化を理解するためには、まず色々な文化を知らなければならない。色々な本を読んだり、色々な映画やドラマを見たり、(今は難しいけど)色々な人と交流をしたりして、自分が知らない色々な文化を知ってほしいなと思う。

【あべのコメント：さらにいえば、学習できる場があったとしても、よみかきが苦手な人はでてくるのだから、そして、中途失明すれば、よみかきできていた人も、よみかきできなくなるのだから、よみかきできなくても社会生活に困難が生じないように社会環境をバリアフリーにしていくことが必要だということです。それがわたしの研究課題です。】

今回の授業を受けて、重度の聴覚障がい者である母親が英語検定を受けるときに、CD音声を聞くリスニングテストのかわりに、担当者に目の前で音読してもらおう方法でテストを受けたと言っていたことを思い出した。重度の難聴のため、目の前で音読されてもきちんと言葉として聞き取れるわけでもなく、普段は読唇術で相手の言っていることを読み取っているものの、英語はもちろん日本語とは舌の動きも異なるため、全く理解できなかったそうだ。現在、英検がどのような配慮を行っているか調べたところ、リスニングテストは音声を文字で映す方法に変えられ、面接もフラッシュカードを用いながら筆談で行えるようになっていたことが分かった。母から聞いた方法よりも聴覚障がいに理解のある配慮が変わったと感じられた。無理に聞く能力にこだわるのではなく、聞く能力が相手と会話するためのものであることを踏まえて、代替方法に筆談での会話が取り入れられているところがよいと感じた。

参考：日本英語検定協会「障がい等ある方への受験上の配慮について」

<https://www.eiken.or.jp/eiken/apply/pdf/tokubetusochi.pdf>

センター試験は視覚障害のある方に対して問題の読み上げ等音声化の配慮がされていないという事実には驚きました。来年からの大学入学共通テストのホームページも確認してみましたが、視覚に関する受験上の配慮に関する記述の中でやはり音声案内については言及されていませんでした。かわりに点字の教育を受けている人には、点字問題冊子と点字解答用紙、試験時間の延長(1.5倍)という対策がされているそうです。しかし私は試験時間1.5倍というのには違和感があります。何を基準として1.5という数字になったのかも気になりますし、試験時間が通常より長いことで受験者の疲労や集中力にも差が出てしまうと思います。やはり、より試験時間に差が生まれにくいような策をとった方が受験者のためでもあり、フェアじゃないだろうかと感じます。試験問題を音声案内化すれば、点字等の対策よりはやはりスムーズになるのではないのでしょうか。

〈参考資料〉大学入試センター 受験場の配慮案内 [https://www.dnc.ac.jp/kyotsu/shiken\\_jouhou/hairyoo.html](https://www.dnc.ac.jp/kyotsu/shiken_jouhou/hairyoo.html)

…英語検定は障がい者の人に対してどういった措置をしているのか気になったので調べてみた。ホームページには、視覚障がい者には点字や墨字を使用して1次試験が行われ、2次試験でイラストが使われる場合、そのイラストの説明文が付記されるという対応がなされるとあった。また、聴覚障がい者にはリスニングを音声の代わりに文字を映して行ったり、2次試験ではフラッシュカードの使用や筆談を行って対応していると記載されている。その他にも肢体やこれら以外に障がいを持つ方に対しても多様に措置が行われていてとても良いことだと感じた。

参考：<https://www.eiken.or.jp/eiken/apply/pdf/tokubetusochi.pdf>

…テストのユニバーサルデザインという話があったので、点字での試験を受ける人はどのように解答しているのか疑問に思い、全国高等学校長協会入試点訳事業部による「点字による試験」 (<https://braille-exam.org/ntj01.html>) というサイトを見てみました。その中でも私がはっとさせられたのは次の配慮事項です。

## 2. 表音文字の特性

点字は表音文字であるため、同音異義語の中には意味を類推するのが困難なものがあります。また、漢字情報がないと意味が容易に推測できない場合もあります。このような場合には、出題者の許可を得て注をつける必要があります。また、地名・人名などの読みは、出題者に確認する必要が生じる場合があります。

今までの授業で点字が表音文字であることや、同音異義語についても考えていたのにどうしてこの問題に気が付かなかったのだらうと思いました。あべ先生のコメントにもありましたが、これは視覚障害者にとっては「あるある」なことなのだと思います。私たちは「特別な配慮」と自分と視覚障害者で比較して言っているけれど、この方たちにとっては日常的に起きる問題であるのに「特別」と言われるのは不可解なことであったのだらうなと感じました。…

私は疑問に思うことがあったのでそれについて書こうと思う。学力試験において、障がい者やニューカマーに対して配慮することを「特別配慮」ということがあると思うが、これは「特別」配慮なのだらうか。私は「特別」ではないように思う。普段の学力試験は、彼ら以外の人達にとっての「普通」に配慮したものであり、この「普通」を彼らに押しつけているに過ぎないように思う。彼らの普通は「普通」とは違うのに「普通」が普通だと思い込んでいる。配慮することは何ら「特別」なことではなく、彼らの普通となるように調整し、スタートラインを同じにしているというだけのことなのではないのかと思う。依然として彼らへの配慮を「特別」なものに見なす限り、学力試験の構造は良い方向へと変化していかないと、彼らにとっての環境つまり私達の考え方が変わらなければならないと思う。…

テストのユニバーサルデザインに関して、実用英語技能検定におけるユニバーサルデザインを公式サイトで調べてみたところ (<https://www.eiken.or.jp/eiken/apply/>)、サイト内の該当箇所に「※2020年度より『特別措置』から『受験上の配慮』に名称変更いたしました」という文章を見つけました。確かに、「特別措置」ということばは差別的な要素を感じるし個人的にもその表現に少し疑問を抱いていたので、表現が変わっていくことに、本当に少しずつの変化かもしれませんが、そういった措置を利用する人たちへの世の中の見方の変化があるのかなあと少し嬉しく思いました。とはいえ、授業資料にもあるようにまだまだ改善点はあるし、同じ教室で受験することはないのかもしれませんが、周囲の目はそこまで暖かくない場合もあるのではと思います。これに関して思い出したのが、私はセンター試験を受ける際に、英語のリスニングで使用するイヤホンが耳に合わず（おそらく耳の穴が小さいので外れやすい上に耳の内部の骨が挟られそうな痛みを感じていました）、「イヤホン不適合者」の申請をしようか本気で迷ったのですが、結局恥ずかしさが勝ってやめてしまいました。実際にイヤホン不適合者の申請をして代用のヘッドホンを使った人の記事 (<https://search.yahoo.co.jp/amp/s/gamp.ameblo.jp/zukain-bibouroku/entry-12438092612.html%3Fusqp%3Dmq331AQRKAGYAb6CsOLGtceC8wGwASA%253D>) を発見しましたが、その中にも「自分だけヘッドホンを配られる恥ずかしさがある上に、周りからは『なんだあいつ』という目線を感じた」とあり、やはり他の人と違う対処をしてもらうことは周囲からの視線を集めてしまうのだと感じました。少しケースは違いますが、こういった配慮が周りに気にされることなく当たり前になればいいなと思いました。

今回の講義では、テストのユニバーサルデザインについて取り扱っていましたが、自分は今回の講義から中学生の頃の出来事を思い出しました。中学の頃の社会のテストで、地図の中の地域の色と、選択肢の中の地域名を合わせて答える問題が出てきたときに、自分の友達はすべての問題を間違えてしまいました。しかし、友達は絶対に合っていると言い、先生に抗議しました。そこで分かったのですが、その友達は色覚異常を患っていたことが発覚し、本人もそこで初めて知ったようでした。それ以来、社会のテストは色を使った問題は出なくなりました。私はこの出来事から、テストのユニバーサルデザインは非常に難しい問題だと考えます。色覚異常に関しては、テストを白黒にすれば問題はないかもしれませんが、聴覚、触覚など障害も多種多様なので、それらに合わせてテストを準備するとなると、かなり大変な作業が必要になると思います。また、そのうえで生徒に公平・平等なテストを提供するとなると、問題はさらに難化すると思います。自分はこの問題には終わりが無いように感じました。そのために、テストは障害などに合わせて問題を変えて、そして問題をできるだけ公平・平等になるように作るしかないと思いました。そして、そのことに関して不満や意見を申す人もいます。自分は不満や意見を人たちにこの現状への理解を促すことが大事なのだと思います。それがテストのユニバーサルデザインに一番大切なのだと思いました。

今回の授業資料の、テストのユニバーサルデザインというのに関連して、海外ではどのような配慮が行われているのか調べました。例として、試験官が書かれた内容を読み上げる、試験官がマークシート用紙に答えを書き写す、口頭による回答を認め、それを筆記する代筆者を利用する、などがありました。私が日本とは違うと感じた点は、テストの際に第三者の介入が多いという点です。日本は、第三者が介入することはまだあまり認められていないように感じます。どうしてこのような違いがあるのか疑問です。

参考：[https://www.jasso.go.jp/gakusei/tokubetsu\\_shien/guide\\_kyouzai/guide/hattatsu\\_bamen/nyuugaku\\_shiken.html](https://www.jasso.go.jp/gakusei/tokubetsu_shien/guide_kyouzai/guide/hattatsu_bamen/nyuugaku_shiken.html) …

・期末テストが遠隔で実施されるのに良い点は、個室があれば一人で受験できるという点です。人が答案を書く時の音、（ひどい場合には）貧乏ゆすりの音など、他人から発せられる音がないので、集中できます。しかし、それが良くない点でもあって、皆がどれくらいの速さで解答できたのか、また実際のテストの雰囲気を知ることが出来ません。他に良くない点は、遠隔でのテストは基本的にパソコンで受験するので、パソコンで入力するのが得意な人と苦手な人との間で、回答時間の速さ、入力ミス、操作方法などあらゆる点で差が出来てしまうという点です。

【あべのコメント：パソコンの操作が必要ない業種はそんなにないので、パソコンの入力になれて損をすることはないでしょう。】

今回の講義を受けて、入試や国家試験などで筆記試験を課されたとき、身体障害者の方に対する配慮はどのようなものがあるのか気になったので調べてみた。「国家公務員 障害者選考試験 受験案内」

[https://www.jinji.go.jp/saiyo/siken/senkou/senkoushiken\\_jukenannai\\_link.pdf](https://www.jinji.go.jp/saiyo/siken/senkou/senkoushiken_jukenannai_link.pdf)というサイトを見つけた。この試験では、例えば、視覚障害のある方は、点字による試験や拡大文字による試験を受けることができたり、書字障害のある方で筆記による解答が困難と認められる方は、パソコンでの入力が可能と書かれていた。たしかにパソコンだと変換機能がついているため不公平だという意見があるかもしれないが、資料にあったようなソフト「Lime」を用いることで公平性を保つことができるだろう。また、意志を伝えるための手段が、ある人にとっては筆記であり、ある人にとってはパソコンでの入力であったというだけなので、試験の際にパソコンの使用を禁止するというのは不公平だと思った。学習の機会は全ての人にあるのだから、全ての人々が試験を公平に受けられるよう配慮が進むといいと感じた。

障害のある学生への支援に関して興味深いサイトがあったので貼り付けておきます。

「障害のある学生への支援・配慮事例—JASSO」

[https://www.jasso.go.jp/gakusei/tokubetsu\\_shien/chosa\\_kenkyu/jirei/index.html](https://www.jasso.go.jp/gakusei/tokubetsu_shien/chosa_kenkyu/jirei/index.html)

中学生の頃、同じクラスに片目が先天性白内障の男子生徒がいた。白内障の方の目はほとんど見えないが、もう片方の目はかろうじて視力があるということで、歩行や運動などは特段問題なくできていた。そんな彼が一番大変そうにしていたのは、文字の読み取りである。国語の授業で席順で当てられて本文を読むときには、顔をぎりぎりまで教科書に近づけてゆっくりと読む。黒板に書いてある文字が薄かったり小さかったりすると、一番前の座席に座っていても読めないことがある。テスト問題の文字が小さいため、問題文を読むのに人一倍時間がかかり満足に回答欄を埋められない。彼に配慮してテスト問題を彼の分だけ大きく印刷したり、黒板は今見やすいか、もっと前方に彼用の席を設けようか、と声を掛ける先生もいたが、彼が見づらいと言わなければ対応してくれない先生の方が多かったように思う。「声をあげないと助けてもらえない」この状況には当時疑問を抱いていた。均等に与えられるべき教育の機会が彼だけ損なわれてしまうとしたらそれはとても残念なことだ。もう少し教育を与える側からの少数者に向けた配慮がされてもよかったですのではないかと思います。

…高校の時の英語と国語のテストでひどいと思ったものがあります。それはテスト問題が一部、問題集の内容そのままだったことです。私はきちんと問題集まで目を通していたので解けたので良かったのですが、実際テストとしてこれはどうなんだろうと思っていました。これはいつも赤点ギリギリしか点数がとれないという子からすればよかったものかもしれませんが、「この授業のテストは、問題集から絶対一題どれかまるまる出るから暗記していく～」と言っている子が周りにいて正直不愉快でした。ただ答えを暗記してテストに臨む子が周りに実際にいる子をみて定期テストをやる意味は何なのか、きちんとテスト勉強している子がかわいそうだという気持ちになったことを覚えています。…

【あべのコメント：同様のコメントがいくつもあったのですが、せっかくテストをやるなら意味のあるテストにしてほしいという思いが感じられて興味深いですね。】

テストは技がある。テストといえば、中国の教育は完全にテスト教育だと思います。良い学生と悪い学生はテストの成績で評価します。成績の重視による、読書のバカというような人がたくさんいます。なぜ、中国の教育成果は全て成績で評

価値するのか、それは原因があります。中国の大学の合格標準は、ほとんどはテストの点数で決める。そうすると、子供が小さい頃から、塾に通わせる。塾を通わせる効果があるかどうかはテストの成績で見る。そして、塾の講師たちの授業では、ほぼ全てテストの対策になるわけです。教育はすでにテストのためのものになる。「中国人はみんなテストに対して上手」と、日本に来てからそういう話を聞きました。（中国にいるときそのような意識しなかった）それを聞いたら、全然嬉しくないです。しかし、それは事実です。例えば、日本能力試験（jlpt、n1は一番上、n5は一番下）中国人はいつも多数の人の点数が上位、または満点である。しかし、本当に喋ってみたら、すごく下手です。日本語能力試験は、話すこともなく、書くこともない。選択式だけで、能力の検定となっています。日本語は漢字が多くて、中国人にとって、ある程度で、文章を全部理解できなくても、正解を選び出せます。それはテストに対しての技だと思います。しかし、こういうようなテストは何の意味があるのでしょうか。外国語を勉強することは、話せなかったら、何の意味もないだろう。N1を取っても、話せない、使えない、それは教育の意味はないと思います。テストを重視しすぎるのは、あまりよくないことだと思います。

-----

テストのユニバーサルデザインという題材で、宮口幸治の「ケーキの切れない非行少年たち」の中で発達障害や軽度知的障害をもつ人々が学校の勉強についていけず、自己肯定感を得られない、いじめの対象になる、ストレスから犯罪行為に手を染めてしまうというケースについて触れているが、生徒・学習者側が自分にどのような配慮が必要かを認識することも重要であると感じた。例えば、自分がディスレクシアであるとわかっていれば「このような配慮が欲しい」と要望を伝えることができるが、自分の障害を認識していない人の場合、必要な要求ができなかったり、断ってしまう可能性がある。

-----

「テストのための学習という概念から解放されてみると、学んだことが身につく」とありましたが、おそらく私はテストがなかったらこれまでまともに勉強してこなかったと思います。自分の学びたいことが明確にある人はテストなどは必要ないと思いますが、それが無い人にとってはテストがあるから学ぶということが当たり前になっていると思います。ですが何事においても、ファーストアクションがなければ発展していかないはずで、何を学べばよいか分からない、何に興味があるのか分からない人にとってはテストのための勉強がそのファーストアクションになるのだと私は考えます。私も実際、興味ないと思っていた分野に関してテストに向けて勉強をしている最中に、「あ、これ面白い」とか「これについてもっと知りたい」と感じるものが出てきました。おそらくテストが好きな人はあまりいないと思いますが、このように何かについて学ぶきっかけになるのは良い点なのではないかと思いました。

また、先生からの質問に関しては、期末テストの遠隔化により、テスト特有の緊張感がなくなる点が問題であると考えています。テストというのは周りにたくさんの受験者がいてその空間には独特の緊張感が張り詰めているというのが従来のテストの在り方であったように思いますが、自宅からの受験となると周りにはだれもおらず、言ってしまうと何でもできてしまう環境にあるので、そんな中行われるものをテストとっていいのにかに関しては多少の疑問を抱いています。

-----

高校生の頃、何のために勉強しているのだろう、と考えたことがよくありました。テスト勉強だと言って、前日の明け方まで詰め込み勉強することがよくありました。その結果、テストでは良い点数を取ることができましたが、一晩で詰め込んだ物なので、1週間後には頭から抜けてしまっていました。受験勉強のために、数学を必死で勉強しましたが、文系の学部に進学した私は、大学に入ってから数学に触れることは全くありません。基本的な九九や筆算など、算数の分野に入るものは生きていく上で必要な知識だと思いますが、因数分解や、たくさん覚えた細かい公式などは、今後の私の人生で役立つときがくるのでしょうか。高校時代に担任の先生に、努力量を図るために受験勉強が必要なのだ、と言われた事があります。受験勉強とは、学力を身につけることよりも、そこに至るまでの努力が求められているのでしょうか。...

【あべのコメント：テスト前の詰め込みで点数がとれる人はすごいなと思っていました。わたしは宿題をだすのがほとんどできない、テスト勉強もろくにできないということで数学、英語、国語以外はまるっきりダメでした。高校から数学もできなくなって、いよいよできるのは英語だけ、国語はふつう、あとはまるでダメという感じ。大学入学後は天国のようでした。どういう学習環境に適しているかは、ほんとうに個人差があります。】

-----

...これまでの経験したテストのうち、英語のテストで多々ひどいなと思ったことがありました。クラスメイトが海外で生まれて国籍が海外のなのですが、Where are you from?に対し、日本出身だとはかかず自分の国籍を書いて提出したところバツが返ってきたそうです。先生の基準で採点されているのも悟れますが、まだ日本が多文化を理解している人が少ないのだとも感じられました。...



同じ学習という行為において、高校生までの学習と大人になってからの学習では何か意味合いが異なるように感じている。その要因として何があげられるかと言えば学力テストの有無である。高校まではテストで点を取らなければ後の進路に影響してくる。そのためテストのためだけに勉強している科目も少なくない。しかし大人になってからの学習は、真に望んでいることを自発的に学習することが多く、テストで確認されるというプレッシャーもない中で知識を身につけることができる。それを学ぶことによる意義を認知できているかどうかの違いは、学習の定着度にも大きく差があるのだろう。私の経験でもそうだが、テストのためだけに学習している科目は多かった。好きな数学や、文章を読み解くための現代文、将来必要になる英語は意欲的に取り組むことが多かったが、それ以外に意義を見出すことはできなかった。テストのためだけに学習する科目が多く、意味がないと感じるため学んだことが身につかない。動画資料に関してもそうである。IT化が進む中、漢字がかけない人が多くなっている印象は塾講師をしている中でも感じる。しかし、漢字を学ぶことの意義さえ知ることができれば、現状は少しずつ変わっていくはずだ。それもわからないまま、ただ漢字を覚えさせられ、テストを受けさせられ、採点も厳しい。それでは、漢字を覚えることに嫌気が差すことも仕方がない。実際に日常で使うとなれば、漢字のとめはねはらいなど気にしていない人がほとんどだろう。それを厳しく、本来であれば正解であるとされる所も間違いとされていれば漢字の学習が進まないことも仕方がない。上記のように、なぜそれを学ぶのかという本質が見えなければ学習した知識は身につくことなく、意欲も湧かない。学校教育に足りないことは、なぜこれを学ぶのか、なぜ知らなくてはいけないのか、という所を伝えることだと考える。その中で学んだことで、最低限これは知っておいてねという箇所をテストで確認するようにすれば良いのではないか。しかし、最終的には教養としての知識ではなく学力としての能力を問わなければいけない。現場のテストのための教育ということも、自分に何が向いているかを判断する材料としても必要なことだと考えている。教育の現場では、教養としての知識と学力のための能力を両立して身につけられる環境構築を進める必要があると考えた。

…今までに受けたテストでよかったものは、中学の時の英語のテストである。私の学校の英語の先生はリスニング問題に洋楽を使用していた。授業中に洋楽をみんなで歌う時間を設け、テストではリスニングとして穴埋めになっている部分を埋める形式だった。それまでリスニングが苦手だった私は、洋楽を使うことでリスニングの感覚を掴むきっかけになったと思う。普通ならリスニング問題をやるころを、洋楽に変えてリスニングの感覚を掴ませてくれた英語のテストが一番良いテストだった。…

今回の漢字テストの話題から私が思い出されたのは、私が通っていた小学校、中学校で開催されていた競書会のことである。私は小学生、中学生のころ、書道教室に通って書道を習い、書写検定なども受けていたため、ある程度書道には自信があった。小学校の頃は競書会でよく入賞していたが、中学生になるとなかなか入賞することがなくなった。もちろん字が上手な人が周りにたくさんいたこともあるが、入賞した人の作品のなかには書道を習っていない人のものもあり、書道を習っていた私からすると上手とは思えないものもあった。そこでその競書会の審査の中心であった国語の先生に審査基準の話聞いてみると、「その作品の字が手本と似ているかどうか」であった。つまり、書いた字がどれだけ上手であろうと、手本として配布されるその字と似ていなければその競書会ではよくないものとされていた。その先生曰く、自分は字が下手でどの字が上手なのかの判断が難しいため、手本により近い字を書く人が入賞者とする、とのことだった。たしかに字の上手さというのは人によってとらえ方が異なる可能性があるためその先生の判断は正しいのかもしれないが、当時の私にはよく理解ができず、プライドが傷ついてとても悔しかった覚えがある。小学校の競書会では手本に似ていなくても、字が「上手」な作品が優秀だとされていたため、中学校の競書会のその判断基準がより気に入らなかったのだと考えられる。…

…私は書道を習っていたので行書で文字を書く機会が多くありました。そのため、日常的にも行書やくずし字で書くのが癖となっていました。しかしある時中学の漢字のテストで、普段は楷書で書くように心がけていたのですが、つい油断してしまいいつもの癖がでて行書で書いて提出してしまいました。結果はもちろん不正解でした。そのときは、全く違和感を感じず、ただ行書で書いてしまった自分が悪いと思いました。しかし今改めて考えてみると、行書も楷書も同じ漢字なのになぜ不正解であったのか不思議になりました。そのときの国語の先生の採点基準が分かりませんが、楷書で書けと言われた覚えは全くありません。もしかしたらあのときの私の解答は、正解でもよかったのではないかなと思います。私は将来的に国語の先生になりたいと思っています。その際には、生徒の解答が行書だから不正解にするのではなく、その行書が正しければ正解にしたり、違っていれば正しい行書を教えたり出来るようにしたいです。

【あべのコメント：「習ったように書けばいい」というのは今回の学生のコメントでもあったのですが、人が学ぶ場というのは学校だけではないのですよね。】

私は小学生のころの漢字テストで、「令」の字でxをもらったことがある。先生のなぜ間違いなのか聞きに行ったが、「漢字ドリルのとおりの方を書きなさい」と言われ、○をもらえなかった。本やテレビで私の書いた字が使われているのを見ていたから、なんでxになったかわからなかったし、すごく悔しかったのを覚えている。確かに採点する側から考えたら、答えを一通りに設定した方が確実な採点ができるかもしれないが、回答する側からすれば、それが誤答として認識され、代々受け継がれていってしまう可能性がある。…

…私の小学校では4年生から書道のテストがあった。私は名前に「怜」という漢字が入っている。「令」の部分はずっと「マ」で書いていたが、その書道のテスト(楷書)ではxだった。自分の名前にxが付くのは非常にショックで、「マ」で書いていて怒られたことはないと言ったが「怜」が正しいと言われた。しかし5年生の担任の先生には好きな方で書きなさいと言われた。今回のプリントにもどちらも正しいと書いてある。やはりあの採点には問題があったと思う。…

中学生の時、「令」の字のせいでテストで100点を逃したことが今でも忘れられない。社会のテストで刀狩令の令を下がマのほうで書いたらバツになった。先生がこういう時の令はこっちで書かないといけなかった。私はそれから、「令」こっちで書いておけば間違いのないと思いき、普段からこっちを使うようになった。家族や友達に何回かこのことを聞いたことがあったが、同じ字でしょと言われた。令和の令もどんな書き方でもよいと言っていたし、私も同じ字だと思うのだが、なんとなくあの時の先生が引っかかって令と書いてしまう。今日、これはデザインの違いすぎず、どちらも正しい漢字とわかったので、これから自信を持って下がマの方を書こうと思う。

中学の国語のテストで「ふわらいどうを漢字で答える」という問題がありました。友達は「附和雷同」と答え不正解でした。その子が先生に抗議すると、今回は「付和雷同」だけが正解だと言われ、最終的には勉強すぎだよと先生に言われた、と話してくれました。…

…「字を正しい書き順で丁寧に綺麗に書くのは大切だ」という意見は、書道を習っていた身としては“伝統”や“美しさ”を重視するという点でももちろん理解できますが、一学生としてはその必要性に疑問を持ってしまいます。“将来性”や“実用性”を重視するというのなら、時代に合わせて変化していくことの方がずっと大切なはずです。…

【あべのコメント：なお、書き順というのは右手で書くときのためのものであり、左手で書くのに適しているわけではありません。書道も左手ではやりにくいものです。書道という「伝統」を理由に右手で筆をもつことを強要されてきた人たちがたくさんいます。一方的な価値で文化が形成され、それに同化することが要求されてきたわけです。】

授業資料の中に「漢字を手書きすることよりも入力する場面のほうが増加している現在では、書きとり問題の必要性が問われるといえる。」という記述がありました。しかし、私自身漢字を入力する機会のほうが圧倒的に増加した昨今においても、漢字を「書く」力は必要であると考えます。こんなことがありました。アルバイトでレジをしていると「領収書ください」と言われました。「但し書きはお品代でよろしいですか?」とお聞きすると「しよせきだいで」と言われました。その時とっさに「書籍代」の「籍」が出てこなくて困ったことがありました。しかしそのお客さんにとって店員が「書籍代」とその場でササッと書けるのは当たり前です。漢字を「書く」力の大切さを実感した瞬間でした。…

【あべのコメント：漢字を入力することに慣れることで手書きできなくなるというのは20年以上まえから言われてきたことで、そういうものだとして認識して、スマホで漢字変換したものを見ながら手書きすればいいと思います。】

漢字のテストについて、学習指導要領の内容をほとんどの教員が理解していないことは問題であるがそれ以上に、学習指導要領で「標準とは手がかりとする」などの曖昧な表現が使われていることが気になった。誰もお手本とまったく同じ字を書くことはできないので、はっきりとこれが正解だというひとつの基準を定めることは不可能である。しかしそうすると教員は、その標準となる漢字にどれだけ近いのか、似ているかで判断するしかないのだから、教員によって採点の厳しさに違いがでてしまうのは仕方がない。つまり、もし自分が理不尽にxにされたと感じても、はっきりとした採点基準がないならそれは自分と教員との価値観の違いにすぎないので採点する側の採点に納得するしかないのではないかと思う。中学、高校のテストでは毎回先生のうち誰かしらは制作ミスをしていた。ミスをするのは仕方がないが、一回受けてみれば誰でも気がつくような間違いを本番のテストの時間に訂正しに来られるととても腹がたった。先生たちも自分で実際に受けてミスがないかの確認をするべきだと思う。

【あべのコメント：ミスは、注意していても発生するものです。だれもが経験することです。】

これまでのテストでひどいと思ったのは中学の理科のテストです。中間や期末テストで授業で使っているワークの問題がそのまま出ました。オリジナルはなく、全部ワークと同じ問題でした。理解度どうこうというよりもただワークを暗記すれば点が取れるので何をテストされているのかよく分かりませんでした。生徒も理解することよりもただ覚えることに力を入れてしまうので、実力テストや受験には何の役にも立たないことだったと思います。

遠隔テストの話とは離れてしまいましたが、遠隔授業になったことでレポートが増えて大変です。いつも履修の時はシラバスを見ながらテストとレポートのバランスを考えて授業を取りますが、今回遠隔授業になったことでシラバスと期末評価の方法が変わってしまったので大変です。…

-----

全ての人にかっちり当てはまる教育方法はない。子育てと同じで正解はない。まさにこの通りだと思いました。しかし、教育方法の標準化といいますか、これをするのがよいとされている、してはダメだと言われている…例えば、生徒にいきなり答えを与えず考える時間を与えた方が良い(思考力を鍛える)、生徒が問題に答えられないとき「どうしてこれができないんだ」と叱ってはならない(できないこと=悪い という構図が生徒の中でできあがってしまうため)などはあった方が良く考えます。

理想は教師が生徒の適性を一人一人見抜いていくことですが、親であっても子のことを分からない場合があるのに、そんなことができるとは到底思えません。それに教師に一人一人を見ている心の余裕はあるのでしょうか。スーパーブラックと呼ばれている職業です。私は教師の方々が日々ストレスに耐えられているだけで既に奇跡だと思っています。やはり、行動指針は必要です。もし、生徒一人一人に寄り添う教育を、と思うのであれば教師一人につき生徒5~10人くらいの極少数クラスでないと、と思います。子ども一人ですら正解の教育をするのが難しいのですから。…

-----

授業についていけない「外国ルーツの子」の苦悩 (<https://toyokeizai.net/articles/-/292409?page=2>) という記事を読んで、「日本語が理解できているからといって、授業が理解できるわけではない。」「日常生活を送るための生活言語と、授業の理解に必要な学習言語は違う。さらに、文化の違いも壁となる。」という部分が印象に残っている。私が通っていた小学校には、ボリビアにルーツをもつ双子の子、フィリピンから引越してきた子など、1学年2クラスで少人数ながらいろいろな国籍の子がいた。双子の子は日本語が話せて友達も多く仲間外れにされるようなことはなかったが、テストの点数はいつも悪くてからかわれることもあった。本人は「勉強苦手だししたくないんだ。」と笑いながら話していたけれど、もしかしたら言葉を話せても授業を理解するのは難しかったのかもしれないし、先生もクラスで自由なく話している子が授業は理解できていないと気づくことも難しいと思った。

-----

…言語に関するテストで採点する側に問題がある、というのは思いつかなかったのだが、このような採点方法が他にもあったらいいなと思ったことがある。それは答えは先生が1度は決めているが、生徒の質問や解答によって、正解となる答えが増えていくやり方である。生徒のこの答えはどうか?という質問に対して、先生もその場できちんと調べた上で返答をしてくれる。また先生自身も、このように書いたら答えは1つになったなと考えている様子をみたりもする。このように互いにとって学びがあることが重要であると思う。

-----

私の祖母は去年から、シルバーカレッジというものに入学し、能や茶道などの日本文化や、海外の劇場、これからの生活不安の解消(適切な保険の使用法など)を教わっています。初めは暇だから始めたくらいの気持ちでしたが徐々に自分の知らないことをたくさん知る機会ができたことに喜びを感じて、講義や課外活動(遺跡訪問)へ積極的に参加するようになりました。愛知県立大学にも、社会人を経験してから入学された方はいらっしゃいますが、年代がかけ離れていて通いづらい人も心配せずに通うことのできる学びの場の存在は大変貴重なものであり、今後もそのような場が増くことが望ましいです。

-----

正解主義について：高校までの教育は授業資料にある通り、正解が一つしかないものを教えることが、教えている内容のほとんど100%であると思います。私は英米学科に入学して、Research&Discussionという授業を受講しているのですが、調査の方法も討論の展開の方法も、もっとはやい時期に教わりたかったです。こういった授業がないことで物事に反論すると、喧嘩に見られてしまうような出来事がどの年代の方々でもあるように見られます。意見交換やそれに加えて礼儀作法なども必修科目として高校までもカリキュラムに参入させてほしいと感じました。

-----

…漢字テストについての動画を見て思ったことは、×にするから反感を買うのではないかと思った。合っていると思って自信を持って書いたものが×にされていたら生徒が不満を持つのは当たり前だ。動画の中の先生方の意見が分かれたように、漢字の正解、不正解は個人の感性で変わるのだから、グレーゾーンのものには注意だけで済ませれば良いと思った。…

…中学一年の初めての英語のテストでaを筆記体で書いたら減点されたのはおかしいと思いました。その先生が授業中に筆記体で書いていたのでそれを書いたらテストのときはダメと言われて納得いかなかったのを覚えています。

-----

高校の時、ある先生が担当の英語のクラスでは、テストでは筆記体を使うように強要されていました。私は違うクラスだったので詳しくは分かりませんが、その生徒たちは苦労したと思います。彼らは単語や文法を覚えたり、エッセイを書いたりするのに加えて、筆記体をわざわざ覚えなければなりません。私はどの文字を使うかよりも、英語で表現できるかが大事だと思います。だから筆記体を強要するのは正しくはないと思います。しかし、逆に筆記体も認めるべきという考えもあります。漢字に様々な形があり、それらが認められているように、筆記体もその一つだと考えるからです。また、文部科学省では「文字指導に当たっては、生徒の学習負担に配慮し筆記体を指導することもできる」とあります。[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/gai.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/gai.htm) 筆記体は強要するのではなく、文字の一つとして紹介、教えるという風に変えればよいと思います。そこで私は漢字もそのようにすればいいのではないかと考えます。「漢字テストのふしぎ」の動画では一つの漢字にたくさんの形が紹介されていました。しかし、それらを認めることで、先生たちはその全てを把握しなければいけなくなり、生徒も混乱するなど問題が発生すると思います。だからまずは漢字には色々な形があるという理解を先生たちの間で共有することが大事だと思います。そして採点の基準を緩めるためには教育現場からではなく、高校、大学試験から変えていく必要があると思います。…

-----

…私は中学や高校での受験英語が好きではない。なぜならそれを勉強しても話せるようにはならないからだ。たとえばテストで成績が良くても、英語を母語としているALTの先生がたまに授業に来た時、たいていの人は話せないどころか聞き取ることもできない。こういう授業は自分がなんのために勉強しているのかわからなくなる。…

【あべのコメント：じっさいに話せるようになるには受験英語にプラスアルファが必要ですが、受験英語で英語が身につかないわけではないですよ。土台はできる。土台があるないでは、大違いです。単語もたくさん知っていて、文章も読める。ある程度は書ける。それって、それなりに十分な言語能力であって過小評価していいものではないです。聞きとる、話すためには、とことんインプットする必要があるわけですが、そんなのは映画を500本くらい見ればいいだけのことです。学習している言語が使用されている映画を100本も見えていない人が、「勉強したのに話せない」などというのは言語学習というものを誤解しています。時間さえあれば語学に投資するという努力をした人だけが話せるようになる。なお、英語以外の言語を必死で勉強してみると、受験英語で到達したレベルのすごさが再確認できます。むしろ英語のほうをもうちょっとがんばってみようかと思えるかもしれません。】

-----

…遠隔授業になってこの授業以外に一つだけテストがあって、他は全てレポートや発表です。発表プラスレポートのところが多く、レポートも調べ物や復讐を含むので全く終わりません。また、その一つのテストは、同時通訳のテストです。授業中に同時通訳するところを先生やクラスメートに見られながら評価されます。正直、一番負担に感じられます。ネットの回線状況も心配しなくてはならないし、同時通訳をしなければならない人の会話が早すぎます。対面授業であれば、先生に不満ごとを言うと、改善してくれますが、オンラインであるから私たちの辛さを感じないのか、不満を言っても何も変えてくれない先生が多いです。

-----

漢字の動画を見て、先生によって採点の違いに大きな差があることは重大な問題であると思いました。私が小学生で新しい漢字を習う時、漢字ドリルに書いてある書き順通りに覚えていました。ある時、前に習った漢字で、書き順が思い出せないものがあって、先生に質問したことがありました。先生は、少し時間をとって調べに行ってくれて、どちらでもいいよと教えてくれました。その時は、どちらでもいいという曖昧な答えにじっくりこない思いをしていましたが、今思うと先生はとても誠実に、小学生の私の質問に対応してくれたのだと思いました。動画の中に出てきた先生の中には、自分の基準で判断している人もいたので、それは子供たちにとって無責任なことだと思います。

-----

…看護の授業を受けていると、必ずといっていいほど、囊という漢字が出てくるのですが、教科書では、囊だったり、囊だったりします。正式には囊だから書けるようにしてと言われるのですが、看護をしていてそんな漢字を書く機会もなければ、時間をかけてそのような画数の多い漢字を手書きする余裕もないような気がして、そんなところにこだわるより、もっと大切なことがあるだろう、と反論したい気持ちが生まれてきます。教える人の立場だと、そういうことまで詳しく教えなければならないのかもしれないけれど、教科書でさえばらつきがあるということは、どちらでもいいのではないかと思います。こういうところに、日本の古さや、頑固さを感じます。

【あべのコメント：看護記録を手書きすることは、じっさいありますよね。連絡ノートみたいなものとか。わたしの周囲でいうと、訪問看護、医療系のデイサービスなど。】

-----

漢字の採点についてです。私は現在家庭教師のアルバイトをしていて、中学生の兄弟を見ていますが、学校の国語の先生の漢字テストの採点はかなり厳しいように思います。トメやハネの有無だけでなく、先生は字のバランスのような点でもバツを与えることがありました。私は生徒に抗議しないのか尋ねましたが、バツをつけられることに慣れてしまい、「面倒くさい」と言っていました。テストは確かに実力を図るために有効な手段であり、すべての人が納得できる回答がマルかもしれません。しかし、目に見えて学習そのものへの意欲をなくしていく生徒を前にしたとき、偶然生徒たちの国語担当になった教師の独特の価値観が与える影響の大きさは図り知れないものだと感じました。

-----

これまで経験したテストでひどいと思ったものは、中学校での音楽の授業で、クラスみんながいる部屋で一人ずつ歌った歌のテストです。とても恥ずかしいし、本来の実力を発揮できない人もたくさんいたと思います。

私は小学校5年生の時の国語のテストで、題名の「題」という漢字がバツにされたことを思い出した。なぜ間違いにされていたかという、「題」の漢字の日の部分の縦線が横線よりはみ出ているからだということだった。今思い出すところだらないことだと思う。基準を設けたり、筆順を正しくしたりしたからと言って、何に役に立つのだと思ってしまう。よく字は性格に出るといいますが、たしかに自が丁寧な人はしっかりしていると思われたり、頭が良いといった印象を持たれたりすると思う。また動画内で先生が言っていたように、字を丁寧に書くことで字を大切にしている態度が見られるというように、世間体を気にするのであれば、ある程度字が整っているということは必要だと思う。しかし、字がきれいというのと、字を基準通り書かなければいけないということは違うと思う。書道家のような字のプロフェッショナルの道に進むならともかく、社会に出て仕事をする上では、いかに実践的に漢字が使えるかというのが大事だと思う。

-----

私が「漢字テストのふしぎ」の動画を見て思い出したのは、小学校で初めてアルファベットを習った時のことです。私は、小学校でアルファベットを習う前に英会話教室でアルファベットを習っており、Aの小文字は筆記体で習いましたし、今でも小文字のAは筆記体で書きます。しかし、小学校5年生の時配られたドリルにはブロック体の小文字のAの見本が載っていました。5年生の頃の先生は筆記体の方がよく使われるのでと両方教えてくれ、どちらを書いても丸を付けてくれました。しかし、6年生になって先生が変わるとドリルと同じブロック体でないと認めないと言われるようになりました。テストなどでは筆記体のAを書くのと直されるため、注意してブロック体のAを書くようにする必要がありました。中学、高校、大学で英語を書くとき、Aをブロック体で書きなさいと言われたことはありません。伝えるために文字を書く際には、人が読める字を書く必要があるとは思いますが、ドリルの字体に必要な以上に縛られるのは良いことではないのではないかと思います。

-----

高校時代の友達に勉強はできるけど字が汚い子がいます。その子は、漢字の読みや選択問題などの書き以外の問題は、問題なく出来ませんが、書きの問題では、字が汚くてかなりバツにされてしまっていたという話を聞いたことがあります。しかし、この友達の字は汚いけど読めるレベルです。その時には、自分も細かく採点されてたという経験をしていたので字が汚い子は、損してるなと思っていました。私は、先生の基準＝正解とずっと思っていたので今回こんなにも元々の基準が緩い事実に驚きです。動画の中で形を見ておっしやっていたのですが、それは、美術の成績を絵が上手ではないからという理由で低くしているのと同じです。でも、実際人によって美術の感性は異なり、芸術に答えなど存在しません。これは、漢字も同じだと思います。そもそもの文字の役割は、伝えるという事です。読み手が漢字を認識して読める字であれば、それはもう正解でいいのではないのでしょうか。しかし、これも人によって異なってきます。やはり、何か明確な答えが一つ存在した方が良いのでしょうか？

【あべのコメント：「悪筆」というのも状況次第、関係次第で、「作家先生」とされる人であれば、どれだけ悪筆でも編集者は読みとり、活字にするわけです。漢字はかたちが複雑だからこそ、どれだけいいかげんに書いても、伝達できるという利点があります。現実社会では、漢字はファジーさに対応した文字なわけですが、テストという空間ではファジーさが許容されてこなかったといえるでしょう。そして多くの人はていねいに字を書くことができるので、それほど問題にならない。でも、ていねいに字を書くこと、厳しい採点の漢字テストで正解を書くことが困難な人もいます。】

-----

…今まで受けたテストでよかったと思ったものは、音楽のテストだ。中学のリコーダーのテストのとき、私は手が小さくてどう工夫しても塞げない穴があった。なので曲の途中で変な音が鳴ってしまい、せっかく譜面も暗記したのになあと落ち込んでいたが、その時の先生は指の位置も譜面も暗記して完璧だから気にすることはないよと言ってくれた。テストは到達具合など結果を確認するものだが、「曲をきれいに演奏できなかった」という結果に対して柔軟に対応してくれた。自尊心は傷つけられることなく、音楽の授業が楽しいと思えた。このような対応のできるテストは少ないかもしれないが、当時の私にとって心の不安が減ったテストになった。

―――

…高校の現代文のテストで、書いた漢字が汚いとされ答えはあっても点数がもらえないことがあった。書き取り問題ではなく、他の設問だ。横には、「女なんだから字は丁寧に書きなさい、読めません。」と書かれていた。年配の女性の先生だった。個人的には、確かに字はよれていたが、読めないことはなかったと思う。加えて、「女なんだから」そう添えられていた言葉がとても理不尽で不快だった。私が男なら点はもらえていたのだろうか。私は幼いころから硬筆を習っていたので、硬筆や習字は寧ろ得意だった。字に男らしさ、女らしさが出るということは私も認識している。もちろん、字が綺麗だというのは美德にもつながる。だが、テストでは字のきれいさや美德を競うわけではない。いつどんな時も字はきれいに書きなさい、そう忠告したいというのはわかるが、そこに男女間、または得点に差をつけてはいけないのではないのかと感じた。

―――

高校時代、隣の席の友達がテスト期間に利き腕を骨折して、ペンが持てなくなったことがありました。私は彼女がどうやってテストを受けるのかと心配していたら、先生がその子用の問題用紙と解答用紙を持ってきたところを見ました。後で聞くと、問題は少し異なり、解答用紙のマスが大きく、書きにくい字でもマスに収まるようにしてあったそうです。私は学校側の配慮は足りないと思いました。確かにその子への対応はちゃんとしてあったのですが、やはり利き手と逆で文字、特に漢字が書きにくかったそうです。また、数学のテストは計算過程を全て筆記させるもので、彼女にとって速く書くことは不可能ですし、片手しか使えないため消しゴムでたくさんの文字を消すのに多くの時間を使ってしまったそうです。なので、歴史問題はマークなどの選択式にすべきだと思し、数学はたくさんの白紙解答用紙を渡して、間違っても消すことなく新しい紙に書けるようにすべきだと思いました。

―――

昨年、ある講義の期末テストで特別な配慮がなされていた。それは、利き手の複数の指を骨折してしまった学生が、字を書くことができないので、先生がパソコンを用意し、キーボード入力で解答を記入するというものであった。テスト開始前に先生はその旨を、私を含み他の生徒に伝えていた。私はそれを聞いたとき、素晴らしい対応だと思った。まず、大学のテストでそのような措置をさせていただけることや、申請をできること自体知らなかった。おそらく、他の学生も知らないであろう。私は、このような配慮があることを他の学生にも知ってもらいたいと思った。もし、知らずにペンで字を書くことによってテストを受けていたら、時間の問題や、字が読み取れないといった理由で不利になる可能性があるからだ。テストにおいても、平等性が求められるということを感じかされた出来事であった。…

―――

…私は小学生のとき利き腕を骨折し、4ヶ月ほど使えなくなりました。その間は全て左で何もかも行っていたわけですが、やはり勉強が1番困りました。字が書けません。それも授業ならまだしも、テストとなると制限時間もあり、頭では理解できていても手がついていきませんでした。漢字テストは、その中でも特に厳しいものでした。楷書でできるだけ綺麗に書くよう指示があったので、それなりに丁寧に時間をかける必要がありました。先生は採点も甘くして、字を分かっているということがわかれば、丸をしてくれましたが、今思うと、同条件でやっていたのが不思議でなりません。例えばテストが違うものになると、障害者の方には障害者の方のテストで、能力を測れば、問題ないと思います。変に条件を近づける方が、障害者を排除しているかのように思えると思います。

【あべのコメント：筆記用具としてポメラのようなものが学校で使用することが一般化すれば、骨折したときなども、片手で入力していくことができるのですが。※ポメラは文章の入力だけができる端末。】

―――

約1ヶ月前、私はTwitterでくさもち(@JOnmtZqeYpAflY4)さんの眩き(<https://twitter.com/jonmtzqeypafly4/status/1271584434832080896?s=21>)を見ました。識字障害を持つお子さんが電子メモをノートの代わりとして使っているところを先生に叱責されたという内容です。担任の先生や他教科の先生、副校長からの理解はあったのですが、叱責した先生からはなかったようです。私はこの眩きを見て、なぜ配慮を必要とする生徒と関わる全ての先生からの理解が得られなかったのか疑問に思いました。「入学前に副校長先生とは、ポメラの導入について相談」という記述から、少なくとも授業で関わりを持つ先生は事情を理解し、電子ノートの持参を認めていて当然だと思いましたが、事実は異なりました。私が通っていた中学校の先生は、授業で関わりのない生徒の詳細まで把握していました。先生間で生徒に関する情報共有がしっかりと行われていたためだと思えます。なので、合理的配慮を実行するにあたって情報共有は不可欠であると思えます。

私は遠隔でのテストを望みません。時間制限あり、持ち込み不可ならなおさらです。ですが、とある科目のテストを遠隔で行うことになりました。先生が学生を信頼して実施に至ったのだと思えます。しかし、学生のことは学生が一番知っています。私は先生に遠隔を望まない旨を伝えましたが、最終的に遠隔で決定しました。全学生が公平にテストを受けられることを望んでいます。

YouTubeの概要欄で紹介されていた松谷知直さんの動画を見ました。松谷さんは文字を読んだり書いたりすることに困難さを感じていて、それを解決するためのツールがiPadだったということでした。障害児に関する授業で学習障害について学び、松谷さんのような文字に関する困難さや、計算、推論に関する困難さを持ち合わせている人がいるということを知りました。学習障害は他の面での発達の遅れを伴わないため、障害だと気づかれず、本人の努力の問題だとされやすいのですが、そのような困難さを抱えている人もいるということを知り、周りの大人がサポートしていけるような環境が必要だと感じました。

テストに関しても、電子機器の持ち込みなどが禁止されている場合が多いと思います。しかし、日常生活を考えてみると、そのような機器を使わずに、問題を解決しなければならない場面というのはほとんどありません。それよりも、様々な媒体などを活用し、自分で考えたり、判断できる力が必要だと思います。学習障害により、困難さを抱えている人に電子機器の持ち込みなどの配慮を認めることはもちろんですが、困難を感じていない人にも認め、そのような機器を使うかどうか、どのように活用するのか自分で選べるようになったらよいのではないかと思います。…

…経験したテストのうちひどいと思ったテストとして100マス計算がありました。100マス計算は左利きだとやりにくいものになっているので、それで点数が出るのはひどいと思いました。また、似たようなものとしてクレペリンテストがあります。このテストによって右利きや左利きなどが関係なく検査ができていないか疑問に思ったことがありました。…

これまで経験したテストの中で、一枚のプリントで問題文が左に、回答欄が右に印刷されたものがとても不便でした。なぜなら、左利きだと字を書くときに問題文が隠れてしまい、書きながら問題を確認することができないからです。右手の人と若干ではありますがスピードや解きやすさに差が出るので、問題と解答欄は用紙が分けてある方が良いと感じました。…

今回このような遠隔授業でリモートでのテストやレポートが成績評価になることが多いなかで、私は新入生がとても不利になると考えてしまいます。先生によっては過去問やこのようにレポートを書くことや例を提示してくれる先生も多いですが、どのような問題ができるか、どのようなことを書けばよいのか情報の少ない先生もいらっしゃいます。私たちは以前その授業を受けたことのある生徒や周りからどのように勉強すればいいのか、これまでの人脈を使って情報を共有し合ってテストに挑むことができるので、精神的な負担は少ないです。しかし、新入生はまだ同級生に会ったことがないという人も多いと思いますし、先輩と知り合える確率も低いと思います。実際に私もリモートで課外活動についての紹介を1年生にした時連絡をもらった後輩に、レポートはどういうことを書くのか質問を受けました。大学について教えてくれる人が少なく、簡単に相談できない状況で全くどういうテストが分からない状態で受けるのは、落単してしまうかもしれない、どのくらい書けばいいのかわからないという精神的負担も大きいと思います。このような事情も学校側には汲んで頂けたらと思います。

【あべのコメント：ツイッターで、今年度の新入生は非常に到達度が高いといった感想をのべていた大学教員がいました。対面授業では「この程度でいいや」といった態度を周囲から身につける場合があるので、「サボり文化」に影響されていない新入生は熱心に授業にとりこんでいるという印象があるようです。わたしの授業は、これまで授業時間内にコメントを書いていたのに対して、今回はライブ配信がおわったあとから計算しても1日以上時間があるので、良質なコメントがたくさんあつまっていると感じています。毎回のように紹介してきた学生と、ほぼ紹介されなかった学生と、両極端になっているかもしれませんが。】

ちょうど遠隔でのテスト期間が間近に迫る中で困っていることがあります。それはテストについての情報が不足していることです。特に言語の会話の授業では、日本語が話せない先生がテストの説明をしてくださったのですが、2年生半ばの今、まだまだその発音に慣れていないこと、また遠隔のため口の動きが見えないこと、音のずれがあることがあり、何も理解できずに困ってしまいました。そこで何人かの友人に聞いたところ、「多分テストが来週にあるよっていったんじゃないかな」と言う人、「再来週って言ってなかった？」と言う人、「そもそもテストやるって言ってた？」という人がいて、戸惑ってしまいました。その翌週には結局テストが行われず、質問をしても返ってこないという状況です。さらに、遠隔授業では電波状況によっては一部に人がとても不利になってしまいます。私もたまに電波が悪いのか他の人の声が途切れることがあり、もしこの会話のテストがオンラインで行われるとしたらかなり不安があります。…

…良くないというか不安に思っていることは、ライブ型のテストの最中にインターネットの接続トラブルや、テスト中にもパソコンが止まってしまった場合についてです。これまで何回か時間制限付きの小テストはあったのですが、五分以内に回答を送信しなければ不正とみなして0点にするとのことなので、毎回接続やパソコンのトラブルが起こらないことを祈りながら小テストをやっています。…

-----

期末テストがライブ型で行われる授業がある。暗記科目なため、本来なら授業資料持ち込み不可な授業であったが、家での受講となると、それを規制することは難しい。学生にとっては、授業資料持ち込み可の方がありがたく、楽であると思うが、持ち込み可になったことで、勉強時間が減り、理解不十分で終わってしまう可能性があると考え。また、テスト時間内に友達と連絡を取り合ったり、インターネットで検索したりなど、学生が不正する可能性もあり、これはカメラをオンにするという条件をつけたとしても、教員が全てを把握することは難しいように感じる。テストを受けている周りの環境の条件が揃っていないため、評価の基準が変わってしまい、平等でなくなると考える。そして、テスト時間内にネット環境が不安定になった場合、試験問題が見れなくなったり、打ち込んだ解答が消えてしまったりなどの問題も起きるかもしれない。今まで行ったことのない未知の世界であるため、不安は募る一方である。

-----

今回わたしの受講している講義では、オンデマンド型で期末テストが実施されるものが多いです。良い点は、(授業によります)時間内であればどんな資料や教科書も見えていいということです。悪い点は、通信障害や周囲の騒音の問題など、テストを受ける側の環境に違いがあり、大学で受けるときのような平等な環境ではないことです。また、不正行為をしやすいという問題もあります。先に挙げたように、資料や教科書を見てもいいとされている授業もありますが、みてもいけないという授業であっても、オンデマンドであれば見ようと思えば見れてしまいます。全員が見ないという保障はありませんし、見た人が罰せられないで良い成績を得るとするのは不平等です。

-----

今年履修しているある教科で遠隔でライブ型の中間テストを経験した。そのテストは、開始前にパスワードで開くPDF書類をダウンロードし、解答開始時間にパスワードが公開された。終了時間を超えたら書類の作成をやめて、のちにユニパにて提出した。提出した書類の最終編集時間が先生は見るできるので終了時間がきたのにもかかわらず回答を続けてしまっている不正行為は判断できたそうだ。私は無事にテストを受けることができたが、友達はパスワードがなぜか届かず、開始後数分はテストを受けることができなかったそうだ。ライブ型で遠隔でテストをする際は、こういったトラブルが発生してしまう。…

-----

…語学のテストはレポートにはできないのでライブ型のテストが行われる予定である。語学、特に文法やリーディングのテストのデメリットは、筆記のテストでスペルミスをするにはあるが筆記では起こりにくいタイプミスや、スペイン語など母音につける「á」アクセント記号をつけるのを忘れやすくなる。カンニングしてある程度点数を稼ぐ人もいれば、全くカンニングせずに実力でテストを受けていると言う人が生まれると思う。カンニングをする人がいることを考慮して、問題数が多くなって見直しができないことが1番私の中でデメリットである。なぜなら見直しの時に、答えを思い出すことが多いので、たくさんの選択問題を短時間でこなさないといけないライブ型のテストより落ち着いて考えて解くことができる対面のテストの方がいい。しかし、ライブ型のテストのメリットもある。パソコンで文字を打つと予測変換が出てきて、対面でのテストに比べてスペルミスをしにくくなる。

-----

…遠隔授業の期末テストについてです。普段はライブ型の授業でカメラはオフ、マイクは当てられた時だけオンにするという形式なのですが、テストの時はカメラをオンにするようにとの指示がありました。不正防止という目的は理解できます。しかし、対面では先生だけにしかテスト中の表情は見られないのに、遠隔では他の学生も見られるので、監視されているようで嫌です。集中できません。

-----

…遠隔授業について：もう前期の終わりがけですが半期遠隔授業をやってみて思ったのは、課題が多いことと自分の成績がどうなっているのかわからないという事です。授業毎にレポートを提出する教科が多いですが、一年生でレポートの正しい書き方もよくわからない状態なので、自分の書いたもので大丈夫なのか、間違っているのかもわからないし、今自分の成績はどれくらいなのかが見えないので、家で一人でパソコンに向かっているだけの私にとってはとても不安になります。先生の負担が増えてしまうかもしれませんがフィードバックや課題毎の評価があるとより安心して受けられると思いました。後期は対面でやりたいですが難しいかもしれないので、後期もオンラインならそのようになるともったいないのかなと感じました。

-----

…大体のレポートやテストがUNIPAに提出なのでよかったです。UNIPAなら自分がちゃんと提出したのか確認できますが、Formsだとたまに何回でも回答を送信できるようになって、自分がちゃんと回答を提出できたのか不安でした。

-----

…語学の授業で、期末テストへの練習も兼ねて、先日小テストがライブ型で行われました。生徒はカメラをオンにして、リアルタイムで問題を解いていく、という形でした。私は、家から県大までが遠いため、いつもの通学の時間を、テストの授業前に家でゆっくり確認できる時間に変えられるという点が良いと感じました。



-----

期末テストが遠隔で実施されて良いと思う点は、答えを紙に書く必要がなく、タイピングで入力する形式になっている点である。私は昔から字を書くのが遅く、高校までのテストでも、時間が足りなくて最後の問題までたどり着かないことが何度もあった。県大の入試の二次試験では文章記述問題が多いので、受験生の時は早く文字を書けるように努力したが、それでもほかの人と比べると遅かったと思う。その一方で、PCのタイピングはどちらかというと早く打つことができる。遠隔でのテストは、Microsoft TeamsのチャットやGoogle Formで入力して回答する形式がほとんどなので楽に感じる。…

-----

(学生に対する質問から)私がとっている授業の期末テストは遠隔授業になった影響でテストの代わりにレポートになったものや、テストをやらずに平常点のみで成績を決定するものがありました。語学系のテストはライブ授業で実施する予定になっています。遠隔のテストということでカンニングが容易くできるというデメリットがあるので、ある授業はテキストを見るのは黙認した上でテスト作成を行うものもあれば、カメラオンにして監視体制をとるものもあります。私は中間テストや小テストでライブ授業でのテストを経験しましたが、とにかくやりにくかったという印象です。例えば、Googleフォームでスペイン語をタイプする際にアクセントやÑなどをすぐに打ち込まず、時間がかかり見直しがおざなりになり、タイプミスが発生したり、zoom上での会話テストは教師の方の通信状況が非常に悪く、何度も教師が入退出することが続き、本来10分でおわるテストが40分かかってしまったりとトラブルが起こったため、期末テストに対して一抹の不安を感じています。また、Googleフォームを使用したテストだと最後に解答と点数が見えるので、人によっては単位取得ができないと成績発表前に悲観してしまう生徒が対面授業の時よりも増えてしまうのではないかと懸念されます。特に心配なのは先述した会話テストがまた行われるのですが、前回はとにかく接続の悪さにパニックになり、勉強した成果がなかなか出ず、今まで受けたテストの中では1番と言っていいほど達成感がなく、むしろ「これってテストでしたよね？」という印象で後味が悪かったです。先述したカンニングに関して、QuizKnockの「オンライン授業、カンニングし放題説【マネしないで】」(<https://www.youtube.com/watch?v=jFzhmDu9FCc>)という動画を視聴しましたが、動画内では「生徒がカンニングする前提で問題を作る」というような発言がありました。また、カメラの死角(カメラに映らないところ)で内職をしてもバレない説という検証もなされており(結局はバレていましたが)、遠隔授業でのテストは対面授業よりもやりづらさがあると動画で改めて思いました。

-----

…友人のクラスではオンラインでテストをするならカンニングしている暇がないくらいたくさん量の問題を出すかもしれないと言われたそうです。もしそうなれば正直しんどいです。ただでさえいつもはある中間テストがなかったため、範囲がとて広いのに問題数も多いとなるとパンクします。カンニングする前提で話しているので生徒への信頼はそんなものかと少し残念でした。

-----

期末テストだけでなく、私は入学して以来全ての課題をレポートによって提出してきました。正直今でもレポートの正しい書き方は理解していません。入学して以来、大学の先生からレポートの書き方について教わったことが1度もありません。“いいレポート”がどのようなものかも分からずに今日までレポートを書き続けてきました。具体的にどのような内容が評価されるのかが明白でないレポート課題はとても不安です。自分の考え方が評価されることがすごく怖いです。それでもやれと言われたら私はやるしかないのでやります。ですが、これまでレポート課題を強いられてきた授業はどれも“楽しい”と感じたことはありません。大学に行って授業を受けることができたら、もっと違う意見や考えを得ることができていたのかも…と感じたことが何回もあります。早く対面での授業が再開される日が来ることを願っています。

【あべのコメント：「考え方」が評価されるわけではないです。誤解や思いこみではなく、事実にもとづいて論じていることができているかを教員は評価します。なにに注目し、なにを根拠に、どのようにのべるのが重要。】

-----

私は今回の試験はzoomでカメラをオンにした状態で試験を行う授業や課題を提出する授業がある。どちらの形態の試験においても私が最も恐れているのは不正を疑われることだ。なぜこのようなことを気にするようになったかという、先日私が学ぶ言語でプレゼンテーションをしてその動画を撮り提出するという課題が出された。その際原稿を暗記しプレゼンテーションを行うという指示であったので、私は全て暗記し何回も撮影を繰り返し提出した。しかし先生からの評価で返ってきたのは、「あなたは原稿を読んでいましたね。」という一言だった。私はそれを見てとても悲しい気持ちになった。遠隔ではパソコンの画面にさえ映らなければなんだってできるかもしれない、先生の方もそれを分かっているが、厳しく評価してくださっているのはわかるが、カンニングをしたと決めつけては欲しくなかった。それからというもの試験に向けてその面においても不安になってしまい、不正を疑われたらどうしようと考えてようになってしまった。

今期はコロナの影響でほとんどの講義がオンラインでテストを行う方針であるが、私の所属している学部が計算問題または演習問題が主となっているため、ネットで調べたり、友達と確認し合うのはカンニングとみなされる。しかし大学側が禁止しようが、生徒側がバレにくいと感じればそのような行為を行うのは容易に想像できる。実際、他大学の私の周りの友達はオンラインのテストはネットで調べて提出し、高得点を出した。このようにカンニングを禁止しようがオンライン上ではそれを見破る技術がないと意味を見さない。不正をした人たちの方が点数が良いと言うのは不公平であるので、いっそのことカンニング前提で調べることを許可し、それに準じた試験の難易度にするのが良いのではないだろうか。

遠隔授業になり、試験の多くがレポートとなりました。私は文章を書くのがあまり得意な方ではないのでたくさんのレポート課題に苦戦しているのですが、これこそがテストの形式としてあるべき形のようにも感じています。今までのテストでは暗記することがメインになっていたことが多かったように思います。言語学習における単語や文法など暗記自体に価値があるものについてはそれでいいと思うのですが、それ以外の学習で、意味をよく理解せずに解説と単語をセットで暗記したりするのはあまり意味がないと感じていました。テスト期間に頑張っても覚えるもしまらくすると忘れてしまし、これではテストのためだけの勉強になってしまっていると思います。でもテストで点を取らなければならないとなるとそうした方法をとってしまうのが現実でもあります。一方で今回のようにレポートでのまとめであれば、学んだことを理解することが必須だし、その上で気になったことを調べるために費やす時間が長くなります。私自身、いろんな文献を読んだりする時間が圧倒的に増え、それによって興味を抱く学びが増えたと実感しています。そしてなにより、多くのレポート課題において自分自身に反映させて考える機会を与えられたことで、日常生活と学習が繋がるが増えたことが良いことだと思っています。それによって学習内容が記憶に残りやすいし、充実した学びをしていると感じると思います。一つ不安に思うところとしては、評価方法に先生側の主観が入ってしまう場合はないのかという点です。個人的には高い評価でなくても自分にとって学びが充実していればいいという考えですが、平等に評価されるように配慮され、それが学生側に示される必要はあるのかなと思います。

【あべのコメント：主題である「問い」が具体的で魅力的であること、論理的な文章であること、事実誤認がないこと、出典と参考文献の書誌情報をきちんと書いていることなど、レポートにはルールがあり、そこを判断する教員がほとんどだと思います。適切な文献を参照し、レポートの形式をきちんと厳守し、ものごとを根拠づけて文章にすることができれば問題ないでしょう。】

…履歴書の話では、私が高校生ときのことを思い出した。私は商業高校に通っていたため、就職の進路を選択する生徒が半分近くいる。その人たちは、一人一企業、採用試験を受けるのだが、履歴書を命がけで書いていた。正式な書類なので鉛筆で下書きしてはいけない、行間や文字の大きさ、角度などはそろっていなければならない、さらにはボールペンで書いたときにインクが擦れてはいけないなど、ハプニングすら許容しない。これは高校側の方針である。しかも一人三枚までは履歴書が無料で配布されるが、書き間違えなどでそれ以上必要な場合は一枚十円を払わなければならない。書いた履歴書は先生方がよくチェックして許可されないと企業に送ることができない。周りの友達がとても大変そうにしていたのを覚えている。授業ではビジネス文書の作成を習うのに、いざ就職の前段階では手書きで完璧に美しく書くことが求められ、それが面接担当者への自分の決意表明のようになっている。そして就職すればパソコンでまた文書を作る。履歴書を書いている友達が少しのミスで絶叫して「だいたいなんで今の時代で手書きなわけ!？」と言っていた。私も同じように思う。履歴書に字が綺麗だとか、美しいといった目に見える一生懸命さが表れているべきという考え方によって書いた字に一喜一憂することにはどれくらい価値があるのだろうかと思う。

【あべのコメント：「だいたいなんで今の時代で手書きなわけ!？」のもうひとつの典型例が日本の投票システムですね。日本の投票自署主義について論文を準備しているところです。履歴書の問題についても、そのうち。】

…履歴書について。トランスジェンダーの配慮のために性別欄はいらないと声があがっているのは知っていましたが、それが医学部入試の時のような、性別による差別の防止にも繋がるということは今回初めて気付きました。私も、性別欄は特に書く必要は感じませんし、履歴書を手書きで書くことを強制する文化もなくすべきだと思います。字の綺麗さや汚さでその人の人格全てを判断できるわけではないし、その判断も雇う側の主観になるからです。会社に入るとパソコンがある程度使えることが前提になると思うので、その点からも手書きが合理的でないことは分かります。顔写真を貼ることの廃止も、性別と同様、外見で差別されたり偏見を持たれることを防止するために必要だと思います。このような、もはや合理的ではなくなっている慣習や、本人ではどうしようもない属性で問題を被る可能性があることに対して、積極的に声を上げることや、社会全体がそれらを変えて行く柔軟さが必要になっていると強く感じます。今起こっている履歴書の変更の動きについては、さらに多くの企業が取り組んでくれることを期待したいです。

-----

…履歴書についてですが、私はい最近電子履歴書というのを知りました。アルバイトの応募の際にWEBで履歴書を添付しなければなりません。私は紙の履歴書を買ってきて、手書きで書いてスキャンしました。中学校で大切な書類を書く時はボールペンを使って丁寧な字で書くと学んだことから、私は今回もそのようにするしかないと思っていました。ですが、履歴書の書き方を調べていた時に、電子履歴書という、サイトにあるフォーマットに文字を入力して、無料でpdfにできるものがあると知りました。<http://rireki.engawa.jp> 今回のようなWEB応募では、電子履歴書の方が見やすいし、添付するのが楽なのでそちら適していたかもしれないと思いました。ある講義では、手書きで書いたレポートは受け付けないと言っていた先生もいました。手書きで丁寧に書いた方が熱意が伝わるという考えもあるとは思いますが、これからの時代、書類を手書きで書くことはさらに減っていきそうと個人的には思いました。

-----